

# ごんぎつね

新美 南吉 作  
かすや 昌宏 絵

これは、わたしが小さいときに、村の茂平というおじいさんから聞いたお話を

です。

昔は、わたしたちの村の近くの中山<sup>なかやま</sup>という所に、小さなお城があつて、中山様

というおとの様がおられたそうです。

その中山から少しほなれた山の中に、「ごんぎつね」というきつねがいました。ごんは、ひとりぼっちの小ぎつねで、しだのいっぱいしげつた森の中に、あなをほつて住んでいました。そして、夜でも昼でも、あたりの村へ出てきて、いたずらばかりしました。畠へ入つていもをほり散らしたり、菜種がらのほしてあるのへ火をつけたり、百姓<sup>しょく</sup>家のうら手につるしてあるどんがらしをむしり取つていつた

り、いろんなことをしました。

ある秋のことでした。二、三日雨がふり続いたその間、ごんは、外へも出られなくて、あなの中にしゃがんでいました。

雨があがると、ごんは、ほつとしてあなからはい出ました。空はからつと晴れていて、もずの声がキンキンひびいていました。

ごんは、村の小川のつみまで出てきました。あたりのすすきのほには、まだ雨のしづくが光っていました。川は、いつもは水が少ないのですが、三日もの雨で、水がどつとましていました。ただのときは水につかることのない、川べりのすすきやはぎのかぶが、黄色くにごつた水に横だおしに





のいちばん後ろのふくろのようになつたところを、水の中から持ち上げました。その中には、しばの根や、草の葉や、くさつた木切れなどが、ごちやごちや入つていましたが、でも、ところどころ、白い物がきらきら光っています。それは、太いうなぎのはらや、大きなきすのはらでした。兵十は、びくの中へ、そのうなぎやきすを、ごみといつしょにぶちこみました。そして、また、ふくろの口をしばって、水の中へ入れました。

兵十は、それから、びくを持って川から上がり、びくを土手に置いていて、何をさがしにか、川の方へかけていきました。

なつて、もまれています。ごんは、川下の方へと、ぬかるみ道を歩いていきました。ふと見ると、川の中に人がいて、何かやっています。ごんは、見つからないように、そつと草の深い所へ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

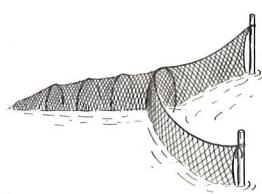
「兵十だな」と、ごんは思いました。兵十は、ぼろぼろの黒い着物をまくし上げて、こしのところまで水にひたりながら、魚をとるはりきりというあみをゆすぶつていました。はちまきをした顔の横つちょうに、円いはぎの葉が一まい、大きなほくろみたいにへばりついていました。

しばらくすると、兵十は、はりきりあみ

やつています。ごんは、見つからないように、そつと草の深い所へ歩きよつて、そこからじつとのぞいてみました。

「兵十だな」と、ごんは思いました。兵

はりきりあみ



ここのでは、川魚のはやのこと。  
びく  
きす  
とつた魚を入れてお  
くかご。



兵十がいなくなると、ごんは、ぴよいと草の中から飛び出して、びくのそばへかけつけました。ちょうど、いたずらがしたくなつたのです。ごんは、びくの中の魚をつかみ出しては、はりきりあみのかかっている所より下手の川の中を目がけて、ぽんぽん投げこみました。どの魚も、トボンと音を立てながら、にごつた水の中へもぐりこみました。

いちばんしまいに、太いうなぎをつかみにかかりましたが、なにしろぬるぬるとすべりぬけるので、手ではつかめません。ごんは、じれつたくなつて、頭をびくの中につつこんで、うなぎの頭を口にくわえました。うなぎは、キュツといつて、ごんの首へまきつきました。そのとたんに兵十が、向こうから、「うわあ、ぬすつとぎつねめ。」

とどなり立てました。ごんは、びっくりして飛び上りました。うなぎをふりすててにげようとしたが、うなぎは、ごんの首にまきついたままはなれません。ごんは、そのまま横つ飛びに飛び出して、一生けんめいににげていきました。

ほらあなたの近くのはんの木の下でふり返つてみましたが、兵十は追つかけては

来ませんでした。

ごんはほつとして、うなぎの頭をかみくだき、やつと外して、あなたの外の草の葉の上にのせておきました。

## 2

十日ほどたつて、ごんが弥助やすけという百姓のうちのうらを通りかかりますと、そここのいちじくの木のかげで、弥助の家内が、お歯黒をつけていました。かじ屋の新兵衛しんべえのうちのうらをみると、新兵衛の家内が、かみをすいでいました。ごんは、「ふふん、村に何かあるんだな」と思いました。「なんだろう、秋祭りかな。祭りなら、たいこや笛の音がしそうなものだ。それにだいいち、

家内  
自分の妻つまをよぶ言い方の一つ。ここでは、弥助の妻のこと。

お歯黒  
昔、けっこんした女の人には、歯を黒くそめた。そのためには使つたもの。





お宮にのぼりが立つはずだが。

こんなことを考えながらやつて来ますと、

いつのまにか、表に赤い井戸のある兵十のうちの前へ来ました。その小さなこわれかけた家の中には、おおぜいの人気が集まつていました。よそ行きの着物を着て、こしに手ぬぐいをさげたりした女たちが、表のかまどで火をたいています。大きななべの中では、何かぐずぐずにえていました。

「ああ、そうしきだ。」と、ごんは思いました。「兵十のうちのだれが死んだんだろう。」

お昼がすぎると、ごんは、村の墓地へ行つて、六地蔵さんのかげにかくれていま

した。いいお天氣で、遠く向こうには、お城の屋根がわらが光っています。墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。と、村の方から、カーン、カーンと、かねが鳴つてきました。そうしきの出る合図です。

やがて、白い着物を着たそぞれつの者たちがやって来るのが、ちらちら見え始めました。話し声も近くなりました。そぞれつは、墓地へ入つてきました。人々が通つたあとには、ひがん花がふみ折られていました。ごんは、のび上がって見ました。兵十が、白いかみしもを着けて、いはいをささげています。いつもは、赤いさつまいもみたい

ふみ折る

かみしも  
ふみ折る  
上下でひとそろいになつた、昔の正式なふくそ。こうしきのとき、男の人が着る白いかみしものこと。

### 六地蔵

墓地や道ばたなどに、六体ならべてまつた地蔵。

な元気のいい顔が、今日はなんだかしおれていきました。

「ははん、死んだのは、兵十のおつかあだ。」ごんは、そう思いながら頭を引っこめました。

そのばん、ごんは、あなたので考えました。「兵十のおつかあは、どこについて、うなぎが食べたいと言つたにちがない。それで、兵十が、はりきりあみを持ち出したんだ。ところが、わしがいたずらをして、うなぎを取つてきてしまつた。だから、兵十は、おつかあにうなぎを食べさせることができなかつた。そのまま、おつかあは、死んじやつたにちがない。ああ、うなぎが食べたい、うなぎが食べたいと思いながら死んだんだろう。ちょっと、あんないたずらをしなけりやよかつた。」

### 3

兵十が、赤い井戸のところで麦をといでいました。

兵十は、今までおつかあと二人きりで、まことにくらしをしていたもので、おつかあが死んでしまつては、もうひとりぼっちでした。「おれと同じ、ひとりぼつ

ちの兵十か。こちらの物置の後ろから見ていたごんは、そう思いました。

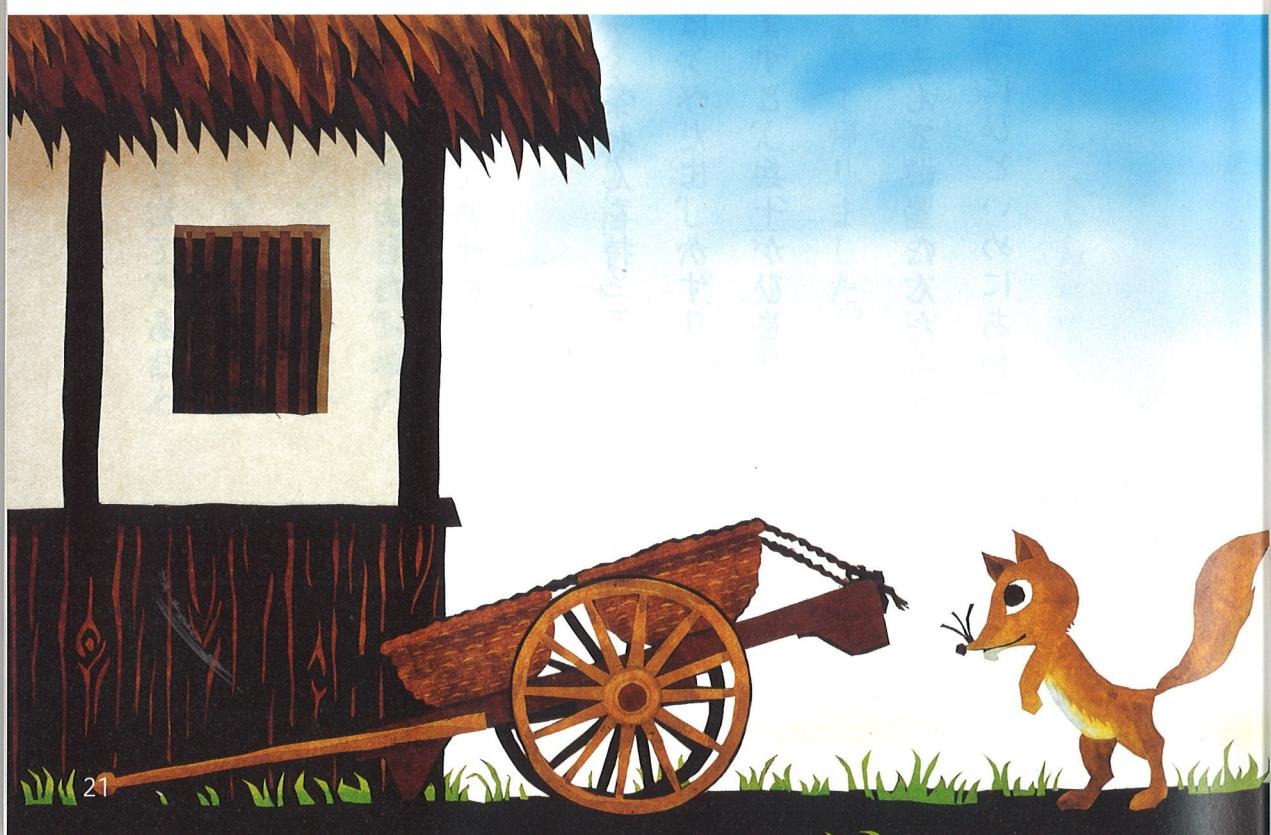
ごんは、物置のそばをはなれて、向こうへ行きかけますと、どこかで、いわしを売る声がします。

「いわしの安売りだい。生きのいい、いわしだあい。」

ごんは、そのせいのいい声のする方へ走つていきました。と、弥助のおかみさんが、うら戸口から、「いわしをおくれ。」

と言いました。いわし売りは、いわしのかごを積んだ車を道ばたに置いて、ぴかぴか光るいわしを両手でつかんで、弥助のうちの中へ持つて入りました。

ごんは、そのすき間に、かごの中から五、六匹のいわしをつかみ出して、もと来た方へかけだしました



10

5

10

5

○積つ  
む

おつか  
あさん。

た。そして、兵十のうちのうら口から、うちの中へいわしを投げこんで、あなへ向かつてかけもどりました。とちゅうの坂の上でふり返つてみますと、兵十がまだ、井戸のところで麦をといでいるのが小さく見えました。

ごんは、うなぎのつぐないに、まず一つ、いいことをしたと思いました。

次の日には、ごんは山でくりをどっさり拾つて、それをかかえて兵十のうちへ行きました。

うら口からのぞいてみると、兵十は、昼飯を食べかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。変なことには、兵十のほっぺたに、かすりきずがついています。どうしたんだろうと、ごんが思つてみると、兵十がひとり言を言いました。

「いつたい、だれが、いわしなんかを、おれのうちへ放りこんでいたんだろう。おかげでおれは、ぬすびとと思われて、いわし屋のやつにひどいめにあわされた。」

と、ぶつぶつ言つています。



4

ごんは、これはしまつたと思いました。「かわいそうに兵十は、いわし屋にぶんなぐられて、あんなきずまでつけられたのか。」

ごんはこう思いながら、そつと物置の方へ回つて、その入り口にくりを置いて帰りました。

次の日も、その次の日も、ごんは、くりを捨ては兵十のうちへ持つてきてやりました。その次の日には、くりばかりでなく、松たけも二、三本、持つていきました。

10

5

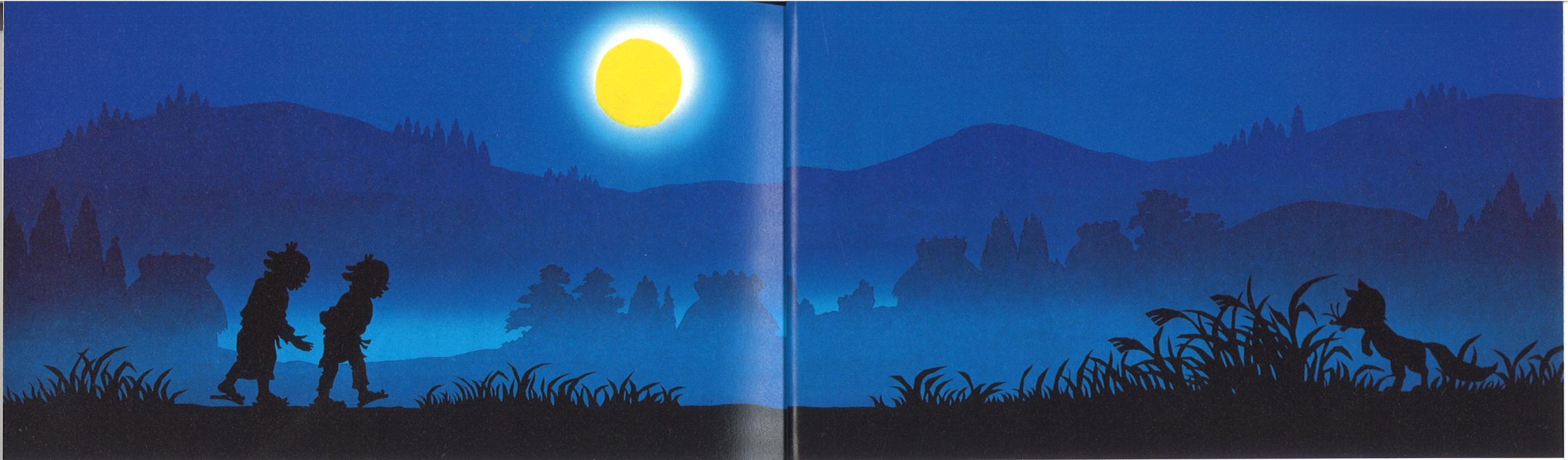
10

5

○松まつ  
たけ

月のいいばんでした。ごんは、ぶらぶら遊びに出かけました。中山様のお城の下を通つて、少し行くと、細い道の向こうから、だれか来るようです。話し声が聞こえます。チンチロリン、チンチロリンと、松虫が鳴っています。

ごんは、道のかたがわにかくれて、じつとしていました。話し声は、だんだん



近くになりました。それは、兵十と、加助と  
いう百姓でした。

「そうそう、なあ、加助。」

と、兵十が言いました。

「ああん。」

「おれあ、このごろ、とても不思議なこと  
があるんだ。」

「何が。」

「おつかあが死んでからは、だれだか知ら  
んが、おれにくりや松たけなんかを、毎  
日毎日くれるんだよ。」

「ふうん、だれが。」

「それが分からんのだよ。おれの知らんう  
ちに置いていくんだ。」

ごんは、二人の後をつけていきました。

「ほんとかい。」

「ほんとだとも。うそと思うなら、あした  
見に来いよ。そのくりを見せてやるよ。」

「へえ、変なこともあるもんだなあ。」

それなり、二人はだまつて歩いていきま  
した。

加助が、ひよいと後ろを見ました。ごん  
はびくつとして、小さくなつて立ち止まり  
ました。加助は、ごんには気がつかないで、  
そのままさつさと歩きました。吉兵衛とい  
うお百姓のうちまで来ると、二人はそこへ  
入つていきました。ポンポンポンポンと、  
木魚の音がしています。まどのしようじに

木魚  
おきょうを読むとき  
にたたく、木ででき  
た道具。



明かりが差していく、大きなぼうず頭がうつって、動いていました。ごんは、「お念仏があるんだな」と思いながら、井戸のそばにしゃがんでいました。しばらくすると、また三人ほど人が連れ立って、吉兵衛のうちへ入ってきました。

おきょうを読む声が聞こえました。

## 5

ごんは、お念仏がすむまで、井戸のそばにしゃがんでいました。兵十と加助は、またいつしょに帰ってきます。ごんは、二人の話を聞こうと思って、ついていきました。兵十のかげぼうしをふみふみ行きました。

お城の前まで来たとき、加助が言いました。

「さつきの話は、きっと、そりやあ、神様のしわざだぞ。」

「えつ。」

と、兵十はびっくりして、加助の顔を見ました。

「おれはあれからずっと考えていたが、どうも、そりや、人間じやない、神様だ。(お思いになつて)神様が、おまえがたつた一人になつたのをあわれに思わつしやつて、いろんな

物をめぐんでくださるんだよ。」

「そうかなあ。」

「そうだとも。だから、毎日、神様にお礼を言うがいいよ。」

「うん。」

ごんは、「へえ、こいつはつまらないな」と思いました。

「おれがくりや松たけを持つていつてやるのに、そのおれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじやあ、おれは引き合わないなあ。」

## 6

その明くる日も、ごんは、くりを持って、兵十のうちへ出かけました。兵十は、物置でなわをなつていました。それで、ごんは、うちのうら口から、こつそり中へ入りました。

そのとき兵十は、ふと顔を上げました。と、きつねが



○差す  
○お念仏

ここでは、おおぜい  
人が集まって念仏  
をとなえることを  
いう。

○連れ立つ



うちの中へ入ったではありませんか。  
こないだ、うなぎをぬすみやがつた  
あのごんぎつねめが、またいたずらを  
しに来たな。

「ようし。」

兵十は立ち上がり、なやにかけて  
ある火なわじゅうを取つて、火薬を  
つめました。そして、足音をしのばせ  
て近よつて、今、戸口を出ようとする  
ごんを、ドンとうちました。

ごんは、ばたりとたおれました。

兵十はかけよつてきました。うちの  
中を見ると、土間にくりがかためて置  
いてあるのが、目につきました。

「おや。」

と、兵十はびっくりして、ごんに目を  
落としました。

「ごん、(おまえ)おまいたつたのか、いつも、

くりをくれたのは。」

ごんは、ぐつたりと目をつぶつたま  
ま、うなずきました。

兵十は、火なわじゅうをばたりと取  
り落としました。青いけむりが、まだ  
つつ口から細く出ていました。

10

5

新美 南吉  
一九一三〜四三年。  
愛知県生まれ。作家。  
「おじいさんのラン  
ブ」「花のき村と盗  
人たち」などの作品  
がある。

火なわじゅう  
昔のてつぱう。なわ  
に火をつけ、その火  
が火薬にうつってた  
まがうち出される。

10

5